

第 11 回大阪大学野田村サテライトセミナー（復興コース） 「阪神・淡路大震災 19 年 KOBE への招待状」

2014 年 1 月 11 日、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムのもと開設された「大阪大学野田村サテライト」にて、「第 11 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。2014 年最初のセミナーは、1 月 17 日で 19 年を迎える阪神・淡路大震災をテーマとしました。人と防災未来センター・震災資料専門員の高森順子さん、公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構研究調査部研究員の高野尚子さんの 2 名を講師に迎え、震災から 19 年間の、KOBE の復興について語っていただきました。



野田村サテライト外観



セミナーの様子

今回のセミナーには野田村教育長を含む 12 名が参加してくださいました。また、今回も、遠隔教育システムを使用して大阪大学人間科学部とつなぎ、大阪大学の教員 1 名と学生 2 名も参加しました。



講師の高野さん



講師の高森さん

セミナーはまず、阪神・淡路大震災の復興過程を紹介した映像から始まりました。映像には、復興の様子が写真や動画で紹介され、どのようにして復興したか、復興のために何を行ってきたかが説明されました。この映像を見る限りでは、人々の努力によって KOBE は素晴らしく復興を遂げたかのように思えますが、「復興は、映像のようなきれいな部分だけではない。」と高野さんと高森さんは指摘されまし

た。

その後、「語り部の 19 年」というテーマで高野さんが講演を行いました。人と防災未来センターの語り部の活動から、震災経験の語りの分類について、聞き手による語りの受容について報告されました。語り部の話には、具体的な震災の教訓から、震災と関係のないような内容まで、幅広い内容が含まれます。具体的な震災の教訓の語りは、聞き手にも受け入れやすいのですが、震災と関係ない話が混ざると、聞き手は、語りをどのように受け止めるか、という戸惑いが見られます。しかし、高野さんは、「このように語り部が自身の震災の経験をありのままに話すことで生じる戸惑いによって、聞き手に『震災は誰にでも起こりうる』ということ伝えられる可能性があるのではないか」とお話しされました。

次に、高森さんが、「阪神大震災を記録しつづける会の 10 年」について講演されました。「阪神大震災を記録しつづける会」が 10 年間にわたり出版した手記の中には、復興住宅の落選はがきの文面が、だんだんと丁寧な文章になっていることを記録した手記もある、と紹介されました。高森さんは、「本人も忘れてしまうような些細な記述によって、当時の心情を想起することができる。人それぞれの些細な気付きを残すことが大切だ」と指摘されました。さらに、現在神戸市の「人と防災未来センター」での企画展、「いま、撮影する『阪神・淡路大震災』－『震災を追体験する』方法として、定点観測写真を考える」の紹介がありました。これは、震災後数年にわたって、復興の様子の定点観測を続けていた大仁節子さんの後を引き継いで、2013 年 8 月に、関西の大学生とともに 19 年目の定点観測を行ったものです。高森さんは、「定点観測を行ううちに、大仁さんの背の高さや場所の好み、文面の特徴などがわかり、大仁さんと一緒に写真を撮って回っているような気持ちになった」と語り、「文章に表すだけでなく、大仁さんの定点観測など、それを次世代が引き継いでいくことを含めて、様々な記録の残し方がある」と整理されました。



セミナーの様子



遠隔通信の様子

セミナー終了後のアンケートでは、「震災を違った角度から聞くことができて良かった。」「震災を伝える方法を考えたい」という感想をいただき、今回の講演が、参加したみなさまにとって、大変有意義なものであったことが伺えました。

今回の「野田村サテライトセミナー・復興コース」も大変充実したものになりました。野田村サテライトセミナーでは今後も様々なコースを設け、多くの方に参加していただけるセミナーを目指します。また、サテライトに導入された遠隔教育システムを存分に活用し、サテライトでの研究・教育に参加できるシステムをさらに充実させていきます。次回は 2014 年 2 月 11 日です。